

## 豪雪地域のヘルスケアニーズに基づく実践の優先度評価に関する開発研究

### 山間豪雪地における高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズに関する研究

研究代表者 佐々木美佐子

共同研究者 小林恵子, 平澤則子, 飯吉令枝, 斎藤智子, 吉山直樹

Study of Life Style and Social Support Needs for Elderly in Heavy Snow Areas.  
Misako Sasaki, Keiko Kobayashi, Noriko Hirasawa, Yoshie Iiyoshi, Tomoko Saitoh,  
Naoki yoshiyama

Niigata College of Nursing, Division of Community Health Nursing  
Niigata College of Nursing, Division of Clinical Pathology

キーワード：山間豪雪地 (heavy snow areas), 高齢者 (elderly), 生活構造 (life style),  
ソーシャル・サポート・ニーズ (social support needs)

#### 目的

過疎化, 高齢化が進展している山間農村部において, 豪雪・山間部という居住条件が高齢者の生活構造や健康にどのように影響するかを把握することは, 地域特性を考慮して高齢者のソーシャル・サポートを整備する立場からも重要な課題である。

そこで, 本研究では, 豪雪地域と少雪地域における高齢者の健康と生活構造及びソーシャル・サポート・ニーズについての実態調査を行い, 対照的な地域を比較することでニーズの傾向を明らかにし, 豪雪地域に暮らす高齢者のソーシャル・サポートのあり方を検討することを目的とした。

本報告では, 冬期間の高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズを中心にその実態をまとめた。

#### 研究方法

##### 1. 対象地域の概況

東頸城郡安塚町 (山間豪雪地) は, 平成 13 年 4 月現在の人口 3701 人, 高齢化率 34.2% で, 降雪量は約 5m (11 月～3 月) である。

対照地域とした西蒲原郡味方村 (農村少雪地) は, 平成 13 年 4 月現在の人口 4760 人, 高齢化率 26.0% で, 降雪量は味方村周辺で約 0.25m (11 月～3 月) である。

##### 2. 対象

安塚町は, 平成 14 年 12 月 1 日現在, 要介護度Ⅱ以上を除く 65 歳以上の一人暮らし及び高齢者のみ世帯の対象者 475 人を無作為抽出により 158 人選定し, 平成 15 年 1 月 10 日時点での死亡 2 人, 転出 2 人を除く 154 人を調査対象とした。そのうち訪問拒否, 不在を除いた 136 人を分析対象とした。

味方村は, 平成 14 年 12 月 1 日現在, 要介護度Ⅱ以上を除く 65 歳以上の一人暮らし及び高齢者のみ世帯の対象者 149 人のうち訪問拒否を除いた 133 人を分析対象とした。

##### 3. 調査方法

調査は戸別訪問にて質問紙を用いて聞き取り調査を行った。調査員は, 大学教員と雇用した在宅看護

師とし、インタビューガイドを用いて説明会を実施した。調査期間は、平成 15 年 1 月 14 日から 3 月 10 日までであった。

調査内容は、基本属性（性、年齢、世帯構成）、受療状況、老研式活動能力指標、生活構造、ソーシャル・サポート・ニーズ、包括的 QOL 尺度として使われている SF-36 (MOS Short Form 36) などとした。生活構造は、松原の生活構造構成要素<sup>1)</sup>を参考に、「時間」は日常の暮らし方、「金銭」は生活費の構成と経済的満足度、「役割」は家庭や地域での役割意識、「規範」は老親扶養や福祉サービス利用の意識、「空間」「手段」については 27 の生活行動項目を設定し、「よく実施している」「まあまあ実施している」「あまり実施していない」「全く実施していない」の 4 段階で回答を求めた。ソーシャル・サポート・ニーズは、生活行動についてそれぞれニーズの有無を調査した。

調査の協力に関しては、面接時に対象者の意思を尊重すること、個人情報に関する秘密を守ることを説明し、確認をした上で了解を得た。

分析にあたり、年齢は前期高齢者と後期高齢者に分類した。生活行動は、「よく実施している」「まあまあ実施している」を「実施群」、「あまり実施していない」「全く実施していない」を「未実施群」にし、各変数間との関係の分析や地域間での比較を行った。統計解析は、SPSS for windows 11.0 を使用し、 $\chi^2$ 検定、t 検定を行った。

## 結果

### 1. 基本的項目

#### 1) 対象者の属性 (表 1)

年齢は、安塚町では平均年齢 73.9(SD±4.8)歳、最少年齢 65 歳、最高年齢 87 歳、味方村では平均年齢 73.2(SD±5.9)歳、最少年齢 65 歳、最高年齢 92 歳であった。

表 1. 対象者の属性

		安塚町	味方村
年代別	75 歳未満	77 人 (56.6%)	87 人 (65.4%)
	75 歳以上	59 人 (43.4%)	46 人 (34.6%)
性別	男性	57 人 (41.9%)	59 人 (44.4%)
	女性	79 人 (58.1%)	74 人 (55.6%)
世帯構成	一人暮らし	27 人 (19.9%)	29 人 (21.8%)
	高齢者のみ	109 人 (80.2%)	104 人 (78.2%)

#### 2) 活動能力

老研式活動能力指標における活動能力の得点は、安塚町では平均得点 10.5 (SD±2.9) 点、味方村では平均得点 10.4 (SD±2.9) 点であった。また活動能力を「手段的自立 (IADL)」「状況対応」「社会的役割」の項目に分けて算出した平均点は、安塚町では IADL4.3 (SD±1.4) 点、状況対応 3.0 (SD±1.2) 点、社会的役割 3.1 (SD±1.0) 点、味方村では IADL4.3 (SD±1.3) 点、状況対応 3.1 (SD±1.1) 点、社会的役割 3.0 (SD±1.2) 点であった。活動能力の得点、「手段的自立 (IADL)」「状況対応」「社会的役割」の平均点は、安塚町と味方村では差がみられなかった。

活動能力の総得点の平均点は、安塚町、味方村共に前期高齢者が後期高齢者より高く ( $p<0.05$ )、味方村では高齢者のみ世帯が一人暮らしより高かった ( $p<0.05$ )。

#### 3) 生活の満足度と今後の生活への意向

現在の生活に「満足している」「まあ満足している」人は安塚町では 126 人 (94.0%)、味方村では 108 人 (82.4%) であった。

今後の生活への意向は、「今の生活を継続したい」人が安塚町では 103 人 (75.7%)、味方村では 109 人 (82.0%) であった。

生活満足度は、安塚町のほうが味方村より「満足している」「まあ満足している」人の割合が高かった ( $p<0.05$ )。また、安塚町、味方村共に性別、世帯構成、年齢で差はみられなかった。今後の生活への意向は、安塚町では「今の生活を継続したい」人が高齢者のみ世帯に多かった ( $p<0.05$ )。

#### 4) 健康度

QOL 得点の各サブスケール別の平均得点は「SF；社会生活機能」が安塚町 91.1 (SD±17.7), 味方村 93.7 (SD±15.5) と最も高かった。次いで平均得点が高かったのは、安塚町では「MH；心の健康」81.5(SD±17.9), 味方村では「RE；日常生活役割機能(精神)」86.7 (SD±26.6) であった。「GH；全体的健康観」の平均得点が最も低く、安塚町では 59.9 (SD±24.3), 味方村では 57.3 (SD±21.3) であった。

「BP；身体の痛み」は味方村の平均得点が高く、「VT；活力」「MH；心の健康」は安塚町の平均得点が高かった (p<0.05)。

各サブスケール別の平均得点を性別、年齢、世帯別にみると、「PF；身体機能」は安塚町、味方村共

表 2. SF-36 を用いた QOL と属性との関係

		対象者 全体	性別			年齢			世帯構成		
			男性	女性	有意差	前期高 年齢者	後期高 年齢者	有意差	1人暮らし	高齢者 世帯	有意差
PF (身体機能)	安塚町	70.5	73.9	68.1		74.7	65.1	*	64.1	72.1	
	味方村	71.4	76.0	67.7		78.1	58.9	*	64.0	73.5	
RP (日常生活役割 機能・身体)	安塚町	71.6	72.4	71.0		69.8	73.9		69.8	72.0	
	味方村	80.5	87.0	75.3		80.6	80.4		78.5	81.1	
BP (身体の痛み)	安塚町	69.0	71.4	67.2		68.7	69.3		65.8	69.7	
	味方村	75.1	80.5	70.9	*	74.9	75.6		80.0	73.8	
GH (全体的健康観)	安塚町	59.9	64.4	56.6		59.9	60.0		56.0	60.9	*
	味方村	57.3	59.9	55.2		56.0	59.6		59.3	56.7	
VT (活力)	安塚町	72.9	74.7	71.7		74.3	71.2		70.0	73.7	
	味方村	68.2	71.0	65.8		68.3	67.9		66.5	68.6	
SF (社会生活機能)	安塚町	91.1	92.3	90.2		90.3	92.2		88.4	91.7	
	味方村	93.7	94.5	93.1		94.0	93.2		88.8	95.1	
RE (日常生活役割 機能・精神)	安塚町	79.5	86.0	74.9		78.8	80.5		75.3	80.6	
	味方村	86.7	90.4	83.8		85.8	88.4		94.3	84.6	
MH (心の健康)	安塚町	81.5	82.3	81.0		79.6	84.0		80.7	81.7	
	味方村	75.8	77.3	74.5		75.4	76.4		76.3	75.6	

に前期高齢者が高かった (p<0.05)。また、味方村では「BP；身体の痛み」が男性で高かった (p<0.05)。その他のサブスケールについて、差はみられなかった。

#### 5) 受診状況

何らかの疾患で医療機関に受診している人は、安塚町 114 人(83.8%), 味方村 107 人 (80.5%) であった。通院手段は安塚町、味方村共に「自家用車運転」が最も多かった。

#### 2. 生活構造

##### 1) 日常の暮らし方

ここ 1 ヶ月の一日の過ごし方は、安塚町では「家庭のこと」で過ごしている割合が最も多く、味方村では「好きなこと」で過ごして

表 3. 生活時間

	安塚町	味方村
働きごと	7.5%	9.3%
家庭のこと	48.3%	41.1%
好きなこと	39.5%	44.8%
その他	4.8%	4.9%

いる割合が最も多かった。男女別にみると過ごしている割合が最も多かったのは、安塚町、味方村共に女性では「家庭のこと」で、男性では安塚町は「家庭のこと」、味方村では「好きなこと」であった。

## 2) 経済状況

主な収入源は「公的な年金」が最も多く、安塚町では123人(90.4%)、味方村では123人(92.5%)であった。

経済的には「困っていない」「あまり困っていない」人が安塚町では117人(86.1%)、味方村では109人(81.9%)であった。

## 3) 役割

高齢者のみ世帯における家庭内での役割は、「大いに果たしている」「まあ果たしている」が安塚町では96人(70.6%)、味方村では85人(84.1%)であった。

地域での役割は、「大いに果たしている」「まあ果たしている」が安塚町では68人(50.0%)、味方村では56人(41.7%)であった。

## 4) 社会規範

子供が老親の扶養・介護をすることについては、「大いにそう思う」「まあそう思う」が安塚町では67人(49.2%)、味方村では73人(55.3%)、福祉サービスの利用については、「大いに利用すべき」「まあ利用すべき」が安塚町では128人(94.1%)、味方村では116人(87.3%)であった。

安塚町では老親の介護については、性・年齢・世帯のいずれにおいても差は見られなかった。また、福祉サービスの利用は、男性のほうが利用すべきであると考えていた( $p<0.05$ )。

福祉サービスの利用は、安塚町が味方村より利用すべきであると考えていた( $p<0.05$ )。

## 5) 生活行動

「よく実施、まあ実施」しているという回答が5割以下の生活行動は、安塚町では、男性で「洗濯をする」「運動やスポーツ」「ボランティア活動」の3項目で、女性で「電球交換・電化製品の手入れ」「運動やスポーツをする」「ボランティアをする」「屋根の雪下ろし」の4項目だった。味方村では、男性で「バスに乗って1人で外出」「洗濯をする」「運動・スポーツをする」「老人クラブに参加する」「ボランティアをする」「雪下ろしをする」「災害への備え」の6項目、女性で「バスに乗って1人で外出」「電球交換・電化製品の手入れ」「散歩する」「運動・スポーツをする」「老人クラブに参加する」「ボランティアをする」「雪下ろしをする」「除雪する」「災害への備え」の9項目であった。

生活行動を性別で見ると、男性のほうが女性よりも実施率が高かった項目は、安塚町では「電球交換・電化製品の手入れ」「ストーブの準備」「屋根の雪下ろし」「除雪する」、味方村では「電球交換・電化製品の手入れ」「書類を書く」「新聞を読む」「ストーブの準備」「庭や家のまわりの管理」「屋根の雪下ろし」「除雪する」「災害への備え」であった( $p<0.05$ )。一方、女性のほうが男性よりも実施率が高かった項目は安塚町では「食事を作る」「洗濯をする」「掃除をする」「布団に関すること」「入浴」、味方村では「食事を作る」「洗濯をする」「掃除をする」「布団に関すること」「ボランティアをする」であった( $p<0.05$ )。

安塚町のほうが実施している割合が多かったのは、「バスに乗って1人で外出」「運動・スポーツをする」「老人クラブに参加する」「庭や家のまわりの管理」「屋根の雪下ろし」「緊急時の連絡体制」「災害への備え」で、味方村のほうが実施している割合が多かったのは、「新聞を読む」であった( $p<0.05$ )。

## 3. ソーシャル・サポート・ニーズ

ニーズありの割合が最も多いのは、安塚町では「電球交換・電化製品の手入れ」で男性の2割、女性の3割を占めていた。ついで、サポートニーズとして2割以上の回答があったのは、「屋根の雪下ろし」

「病院・医院へ受診する」「除雪する」の3項目であった。味方村でニーズありの割合が最も多いのは、「電球交換・電化製品の手入れ」「除雪する」であった。次いで、「病院・医院へ受診する」、「食料品の買い物」「書類を書く」「預貯金の出し入れ」となっていた。

安塚町のほうがニーズありの割合が多かったのは、「バスに乗って一人で外出」「ごみを捨てる」「老人クラブに参加する」「ストーブの準備」「屋根の雪下ろし」であった (p<0.05)。

女性のほうが男性よりもニーズありの割合が多かった項目は、安塚町では「ボランティアをする」「屋根の雪下ろし」、味方村では「電球交換・電化製品の手入れ」「書類を書く」「除雪する」「病院・医院へ受診する」であった (p<0.05)。

年齢では、安塚町は「一人で食事の用意をする」「掃除をする」「入浴する」「ごみを捨てる」「電球交換・電化製品の手入れ」「預貯金の出し入れ」「庭や家のまわりの管理」「屋根の雪下ろし」「除雪する」「緊急時の連絡

体制」、味方村は「食料品の買い物」「食事を作る」「書類を書く」「除雪する」「預貯金の出し入れ」「病院・医院へ受診する」「ストーブの準備」で後期高齢者のほうがニーズありの割合が多かった (p<0.05)。

世帯では、安塚町は「掃除をする」「入浴する」「ごみを捨てる」「書類を書く」「散歩をする」「運動・スポーツをする」「屋根の雪下ろし」「除雪する」、味方村は12項目にわたって一人暮らしのほうがニーズありの割合が多く (p<0.05)、ニーズの高い項目を見ると「電球交換・電化製品の手入れ」「除雪する」「預貯金の出し入れ」「書類を書く」などであった。

表 4. 生活行為とサポートニーズ

	生活行為(実施%)			サポートニーズ(有の%)		
	安塚町 n=136	味方村 n=133	有意差	安塚町 n=136	味方村 n=133	有意差
バスに乗って一人で外出	103(75.7)	42(31.6)	**	19(14.0)	8(6.0)	*
食料品の買い物	119(87.5)	106(79.7)		24(17.6)	17(12.8)	
食事を作る	112(82.4)	107(80.5)		9(6.6)	8(6.0)	
洗濯をする	101(74.3)	90(67.7)		4(2.9)	5(3.8)	
掃除をする	106(77.9)	104(78.2)		7(5.1)	6(4.5)	
入浴する	120(88.2)	118(88.7)		5(3.7)	6(4.5)	
布団に関すること	96(70.6)	95(71.4)		7(5.2)	4(3.0)	
ごみを捨てる	107(78.7)	106(79.7)		10(7.4)	3(2.3)	*
電球交換・電化製品の手入れ	69(50.7)	75(56.4)		39(28.7)	27(20.3)	
預貯金の出し入れ	107(78.7)	102(76.7)		10(7.4)	14(10.5)	
書類を書く	98(72.1)	95(71.4)		18(13.2)	15(11.3)	
散歩をする	83(61.0)	70(52.6)		9(6.7)	5(3.8)	
運動・スポーツをする	40(29.4)	20(15.0)	**	9(6.7)	5(3.8)	
老人クラブに参加する	73(54.5)	31(23.3)	**	7(5.2)	0(0.0)	**
ボランティアをする	30(22.1)	23(17.3)		6(4.4)	3(2.3)	
病院・医院へ受診する	111(81.6)	103(77.4)		29(21.3)	24(18.0)	
家族と話をする	121(93.1)	119(89.5)		3(2.3)	2(1.5)	
近隣と話しをする	112(82.4)	102(76.7)		6(4.4)	8(6.0)	
新聞を読む	105(77.2)	118(88.7)	**	5(3.7)	1(0.8)	
趣味をする	82(60.3)	79(59.4)		5(3.7)	9(6.8)	
ストーブの準備	100(73.5)	101(75.9)		21(15.4)	4(3.0)	**
庭や家のまわりの管理	101(74.3)	83(62.4)	**	11(8.1)	6(4.5)	
雪下ろしをする	54(40.6)	6(4.5)	**	35(26.3)	10(7.5)	**
除雪する	85(62.5)	76(57.1)		27(20.0)	27(20.3)	
防火・防犯	118(86.8)	112(84.2)		3(2.2)	0(0.0)	
緊急時の連絡体制	110(80.9)	69(51.9)	**	12(8.8)	11(8.3)	
災害への備え	92(67.6)	49(36.8)	**	12(9.0)	4(3.0)	

人(%)

#### 4. 必要とするサポートの具体的内容と現在利用しているサービス

安塚町で、1割以上の者がニーズありと回答した生活行動は8項目であり、その具体的な内容と現在利用サービスを表5にまとめた。「1人で外出」「買い物」「病院受診」においては、『送迎』のニーズが最も多く、家族や知人・近所の人の支援やスクールバス、タクシーなどを利用していた。「屋根雪下ろし」「玄関前の除雪」については、家族・親戚・近所の人に無償または有償のいずれかで頼んでいる者が最も多かったが、ニーズとして『気兼ねなく頼めるシステム』があった。「電球交換」は特に『高い所の電球交換』のニーズが多く、家族や知人・近所の人・ヘルパー等の支援、電気屋等業者を利用していた。「書類書き」は『難しい書類の代行・代筆』のニーズが多く、家族や知人・ヘルパー・役場職員が代行していた。「ストーブの準備」の『灯油の購入』ニーズについては、業者の宅配サービスを利用している者が多かった。『灯油タンクからストーブに給油する』『ストーブの室内移動』については、家族やヘルパーの支援を得ていたが、他の生活行動とは異なり、親戚・知人・近所の人々の支援はなかった。

表5. 必要とするサポートの具体的内容と現在利用しているサービス

生活行動	人数	サポートが必要な具体的内容	現在利用しているサービス
1人で外出	19	送迎、付き添い、運賃確認・切符購入、歩行介助、荷物持ち、ボランティアによる送迎、バスの本数増加、電車やバスの乗車方法の指導	駅員の協力、家族による送迎、知人による送迎、タクシー利用、スクールバスに同乗、ボランティアによる送迎
買い物	24	食材の宅配、買い物の代行、買った物の配達、買い物時の送迎、買い物時の付き添い、バスの本数増加、近所の人への差し入れ	家族が買ってくる、家族に店へ連れて行ってもらい、ヘルパーに買ってきてもらう、業者による宅配、農協による送迎サービス、スクールバス同乗、電動車椅子を購入
電球交換	39	電球交換（特に高所）、電化製品の手入れ、点検、修理、電気屋等によるサポート	家族、親戚、ヘルパー、知人、近所の人に依頼、電気屋に依頼
書類書き	18	難しいものの代筆、全部の代筆、書類書きの補助	家族、ヘルパー、親戚、知人に代筆してもらい、役場職員が代筆、成年後見制度、
病院受診	29	送迎、付き添い、往診、医療費援助、病院内の案内、受診日数の調整、歩道の整備	家族による送迎、知人・親戚による送迎、タクシー利用、診療所の送迎車、家族による付き添い、往診
ストーブ準備	21	灯油の配達、灯油の購入、タンクへの給油、ストーブの準備、ストーブの室内移動	業者の灯油宅配、ヘルパーに頼む、家族が来て準備する、家族が来てタンクに入れる
屋根雪下ろし	35	屋根の雪下ろし、接待や気を使わず気兼ねなく頼めるシステム、費用の援助、落雪した玄関前・道路の除雪	家族、業者、近所の人、親戚に頼む、役場の雪下ろしサービス、役場の費用補助
玄関前の除雪	27	道つけ、除雪した公道から玄関までの除雪、道路の除雪、接待や気を使わず気兼ねなく頼めるシステム、必要時の除雪	家族、業者、近所の人、親戚に頼む（無償/有償）、役場職員が来て実施、役場の費用補助、共同の消雪パイプを設置、ボランティアに頼む

#### 考察

##### 1. 山間豪雪地と農村少雪地における高齢者の活動能力と健康実態

老研式活動能力指標の得点数の平均は安塚町 10.5 (SD±2.9) 点、味方村 10.4 (SD±2.9) 点で、65歳以上高齢者を対象に調査した古谷野ら(1991)<sup>2)</sup>や藤原ら(2003)<sup>3)</sup>の結果よりも低かったが、安塚町、味方村の2つの町村間には差がみられなかった。また「手段的自立 (IADL)」「状況対応」「社会的役割」も2つの町村間には差がみられず、2つの町村の対象者は同様の活動能力であると考えられる。

活動能力の得点、IADL 得点は、神宮ら<sup>4)</sup>の後期高齢者になるほど活動能力の得点や手段的自立 (IADL) 得点は下がるとした結果と同様に、安塚町、味方村共に後期高齢者より前期高齢者が高かった。

SF36 で測定した QOL は、安塚町、味方村共に「社会生活機能」が最も高く、「日常生活役割機能（身体）」「身体の痛み」「日常生活役割機能（精神）」「活力」は全国の平均得点を上回っていた。

また、安塚町では味方村より「身体の痛み」を感じている人が多かったが、その理由のひとつとしては安塚町には山坂が多く、沢沿いに家が点在していることが考えられる。また、安塚町では豪雪の時期にもかかわらず、「活力」「心の健康」の得点が高かった。精神的健康度が高い人は生活への満足度が高いといわれている<sup>5)</sup> が、本調査でも生活の満足度が高い人は安塚町に多かった。

## 2. 山間豪雪地と農村少雪地における高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズ

### 1) 生活構造

日常の暮らし方は、川端の調査では<sup>6)</sup>、女性は「家庭のこと」、男性は「働きごと」の割合が高かったが、本調査地域は2つの地域共、高齢者では農業をしている人が多いため、冬期間は田畑の仕事ができず、男性も「働きごと」の割合は少なかった。安塚町では男女ともに「家庭のこと」で過ごす割合が高かったが、これは男性も除雪などの家の管理などで、家庭内での役割があるためと思われる。

生活の中での主な収入源は9割以上が公的な年金であり、経済的には「困っていない」と考えている人が8割を超えていることが明らかになった。

役割意識では、地域での役割を果たしている人の割合は安塚町のほうが多かった。安塚町では地域全体に高齢化が進んできており、地域の中でも現役でいる必要がある状況がうかがえる。

また、安塚町では男性の福祉サービスの利用意思が高く、サービスを利用してできるだけ今の所でのまま生活をしたと思っている人が多いと考える。

生活行動を性別でみると、「食事を作る」「洗濯をする」「掃除をする」といった家事役割は女性のほうが実施しており、「電球交換・電化製品の手入れ」「屋根の雪下ろし」のように高い所での作業や力仕事は男性が役割分担していたが、男性も「洗濯をする」以外は5割以上の人は家事を行っていた。役割分担をしながらも共に協力し合っている状況がうかがえる。

安塚町では味方村に比べて「バスに乗って1人で外出」の人が多くなっていたのは、買い物をする場所や医療機関等が身近にないためバスを利用する機会が必然的に多くなっているためと考える。また、「運動・スポーツをする」「老人クラブに参加する」では安塚町のほうが実施している割合が多く、安塚町のほうが地域の中での活動に参加していると思われる。「緊急時の連絡体制」が安塚町で実施している割合が多かったのは、山間部で緊急時に直ぐ駆けつけてくれる身内などが身近にないことも影響していると考えられる。「屋根の雪下ろし」「災害への備え」は豪雪地である安塚町で実施している割合が多かった。

「新聞を読む」は安塚町では地区によって新聞が配達されない所や、新聞を読む習慣があまりない人もあり、味方村に比べて実施状況は低くなっていた。

### 2) ソーシャル・サポート・ニーズ

2つの地域ともニーズありの割合が最も多いのは、「電球交換・電化製品の手入れ」であった。高齢者は加齢に伴い、感覚機能や身体機能、平行機能の低下により、高所での電球交換等は転倒の危険を伴ってくる。そのため後期高齢者ではよりニーズが高くなっており、高い所の電球交換、電化製品の手入れ・点検、修理、電気屋等によるサポートを必要としていた。その他、地域に限らず後期高齢者では「書類を書く」「除雪する」などの字を書くことや力仕事へのニーズが高くなっていた。

必要とするサポートの具体的な内容では、外出、買い物、病院受診の際の「送迎」が多くあげられていた。現在は家族や知人の支援、スクールバス、タクシー等を利用して外出しているが、さらにボランティアによる送迎や利用しやすい交通手段を検討していく必要がある。また安塚町で実施している割合

が高い「バスに乗って一人で外出」「老人クラブに参加する」は味方村に比べてニーズが高かった。安塚町では地域の中での活動が味方村に比べて活発であることから、1人で外出するニーズが高くなっていると思われる。地域の中での活動を行ったり役割を持ったりすることは、地域の活動を活性化するだけでなく、健康の維持にもつながるといわれており<sup>7)</sup>、そのための足の確保は重要であると考えられる。

高橋らの調査<sup>7)</sup>では農村部においては気兼ねなく利用できる公的サポートの充足・充実を図る必要性があるとしているが、本調査においても「屋根の雪下ろし」等、気兼ねなく頼めるシステムを望む人が多かった。今後は、気兼ねなく利用できる公的なサービスの確保が必要である。

## 結論

山間豪雪地と農村少雪地における高齢者の健康と生活構造、ソーシャル・サポート・ニーズについての傾向の把握と比較を行い、以下のことが明らかになった。

- 1) SF36で測定したQOLでは、「BP;身体痛み」は味方村の平均得点が高く、「VT;活力」「MH;心の健康」は安塚町の平均得点が高かった。
- 2) 日常の暮らし方は、安塚町では「家庭のこと」で過ごしている割合が最も多く、味方村では「好きなこと」で過ごしている割合が最も多かった。
- 3) 役割意識では、「地域での役割」を果たしている人の割合は安塚町のほうが多かった。
- 4) 生活行動では、「バスに乗って1人で外出」「運動・スポーツをする」「老人クラブに参加する」「屋根の雪下ろし」「緊急時の連絡体制」等は安塚町のほうが実施している割合が多く、「新聞を読む」は味方村のほうが実施している割合が多かった。
- 5) ソーシャル・サポート・ニーズでは、安塚町のほうがニーズありの割合が多かったのは、「バスに乗って一人で外出」「ごみを捨てる」「老人クラブに参加する」「ストーブの準備」「屋根の雪下ろし」であった。
- 6) 必要とするサポートの具体的内容では「送迎」のニーズが最も多かった。

以上のことから豪雪地域に暮らす高齢者へのソーシャル・サポートのあり方として、「屋根の雪下ろし」等、気兼ねなく利用できる公的サポートや、外出、買い物、病院受診の際の「送迎」の必要性が示唆された。

## 引用文献

- 1) 松原治郎. 生活構造と地域社会. 家族と地域の社会学. 東京: 東京大学出版会, 1980: 143-68
- 2) 古谷野亘, 橋本廸生, 府川哲夫他. 地域老人の生活機能—老研式活動能力指標による測定値の分布—. 日本公衆衛生学雑誌 1993; 40(6): 468-73
- 3) 藤原佳典, 新開省二, 天野秀紀他. 自立高齢者における老研式活動能力指標得点の変動. 日本公衆衛生学雑誌 2003; 50(4): 360-7
- 4) 神宮純江, 江上裕子, 絹川直子. 在宅高齢者における生活機能に関する要因. 日本公衆衛生学雑誌 2003; 50(2): 92-104
- 5) 梶本妙子, 福本恵, 堀井節子. 地域住民の身体的, 精神的, 社会的健康度の評価. 京都府医大短紀要 2000; 9: 239-47
- 6) 川端フミヨ. 老年者の健康と生活構造並びに意識に関する調査研究. 関西医科大学雑誌 1982; 34(2): 453-67
- 7) 高橋和子, 太田喜久子. 都市部と農村部における高齢者の地域ケアシステムに関するニーズとその傾向. 老年看護学 2001; 6(1): 50-7